

天明3年浅間山噴火災害絵図の分析

Analysis of picture maps depicting the disasters caused by Asama volcano's 1783 eruption

地理環境学コース 大浦 瑞代 Mizuyo OURA

災害認知研究では、災害の頻度・被害度や経験が人々の認知に大きく影響すると論じられている。かつて筆者は、常襲災害として局地風を扱い、伝統的対応の不吹堂祭祀から住民の局地風認知を考察した。本稿では、発生頻度が低くても甚大な被害をもたらす大規模な自然災害について、天明3年(1783)浅間山噴火を事例として考察をおこなった。

浅間山は群馬県と長野県の県境に位置し、歴史的に数多くの爆発的噴火を繰り返している。天明3年の噴火は旧暦4月8日(新暦5月8日)に始まった。噴火は次第に激しさを増し、関東全域に火山灰が降下した。活動が最高潮を迎えた7月8日(新暦8月5日)には、火山噴出物が北麓を流れ下って吾妻川に流入し、それによる洪水が下流の利根川流域にまで及んだ。広域に甚大な被害をもたらされたため、この災害に関して数多くの文書や絵図が残されている。そのなかで筆者は絵図に着目し、図中に示される災害情報の分析をおこなった。

絵図に描かれる内容は、噴火と被害の2つに大別できる。被害についてはさらに、降灰被害と洪水被害に分けられる。絵図の構図や図中の文字記載などの共通性から、同一の情報グループに属する絵図をくくり出すことができる。

まず噴火経緯を描く絵図については、日付と図像の一致によって、4場面を描くグループと5場面を描くグループが区別できる。しかし、4場面を描くグループには噴煙がより強調して描かれる絵図があり、5場面を描くグループでは写しに伴って場面数や文字記載が追加され図像が誇張されている。

被害を描く絵図においても、浅間山南麓の被害

について文字記載内容が一致するグループにおいてすら、噴火の描写や被害域の表現に大きな違いがある。なかには事実と異なって、浅間山以外の山体が噴火し、被害域をより広く描く絵図も存在する。そして洪水被害を描く絵図のグループにおいても、流失村名や文字記載が共通しているにも関わらず、流失村名の記載箇所や洪水発生源には違いが見受けられる。

はじめに指摘したように、共通する災害情報を示す絵図グループが存在することは、写しが多く行われたことを意味している。それは、災害情報への需要が多く存在し、かつ災害情報が間接的に受容されたことを表している。

しかし、その災害情報は絵図の作成時期や作成者の地理的・社会的属性の違いなどによって内容が異なり、情報の収集方法によって精粗が生じうる。作成目的によっても、情報は取舍選択される。洪水被害を具体的に記載する絵図では、図によって被害項目や被害数などが異なっており、さまざまな災害情報が錯綜していたのである。また、伝播の過程で誇張や憶測が加えられて、内容が変化することもあった。情報を選択する受け手の価値観や関心の所在の違いも反映されるだろう。そのため、同一情報グループであっても異なった図像が描かれたと考えられる。その図像の違いは、ベースマップとして空間を表現する地域情報よりも、絵図の主題である災害情報の部分で著しい。たとえ不確かな伝聞情報に基づいていたとしても、災害情報に力点が置かれて絵図が描かれた証である。

現実には1つの災害であっても、情報の伝播に伴って多様な災害像が人々の心理に描かれたのである。